

かつて破綻した旧3町が直面する逆境

旧赤池町

▶財政再建期間
平成3～12年度
▶赤字解消額
31億7,332万円



旧金田町

▶財政再建期間
昭和56～62年度
▶赤字解消額
10億9,057万円



旧方城町

▶財政再建期間
昭和57～平成3年度
▶赤字解消額
21億4,762万円



かつて産炭地として筑豊に名をはせた福智町合併前の旧3町。「筑豊に5円以下の貨幣はない」と言われる好景気で、町は活気にあふれました。しかし時代は石炭から石油へ。昭和40年代後半からのエネルギー転換で、基幹産業は消滅。多くの失業者と鉱害地が町に残りました。

炭鉱閉山後の活路を見出すため、旧3町は新たな産業を模索。財政再建を試みますが、成果をあげられず借金はふくらみ、ついに町の倒産を意味する財政再建団体へと転落しました。

しかしその逆境は行政と住民に意識改革を



↑合併後の町職員の手による道路補修。旧町時代から続く経費削減策は、再建に向かう町の象徴的な姿として注目された。

もたらしします。住民による多くのボランティア団体の自発的な組織、行政の徹底的な経費削減と事業の見直し。町一丸で取り組む強い意志が原動力となり、旧3町はいずれも計画より早く再建団体を脱却しています。

全国でも類を見ない、財政再建から立ち直った3町の合併で誕生した福智町。しかし急激な人口減少や合併特例の終了などこの町はふたたび、厳しい逆境に立たされています。



↑「気負いや重圧は全く無い」と充実した気力と体力で試合に臨んだ久富選手。開始直前、命運を託すように額を拳に当てました。

逆転

立ち上がる。何度でも

序 Prologue

逆転の鍵

誰しも壁にぶつかり、乗り越えなければならぬ試練が訪れます。今月のテーマは「逆転」。強い意志で逆境に立ち向かう事例から、この町全体に今迫る問題、そして打開するヒントを探ります。

逆境にくじけない覚悟と挑戦

熱

気あふれるジムの一角で、一心不乱にサンドバッグを打ち続ける23歳のプロボクサー、久富修平選手（弁城出身）。弱肉強食の厳しいプロの世界で戦う久富選手には、競技人生の大きな転機がありました。

幼少時から格闘技に憧れを抱いていた久富選手は、高校卒業後に筑豊ボクシングジムの門をたたきます。身長182cmの恵まれた体格と強力な右ストレートを生みだすパワー。迎えたデビュー戦を1R35秒KO勝利で飾り周囲の期待に応えます。

しかし臨んだ2戦目に、後の西日本新人王となる選手にKO負け。「自信が全て崩れました。でもだからこそ本気になった。あの敗北が全力で挑む覚悟を、折れない心を生んだと思います」。

練習全般を二から見直し、毎日早朝に走り込み。日中は家の建設業で肉体労働。夜はジムで週6日の激しい練習と、自由を犠牲にボクシングを続けることに全てを注いできました。復帰初戦は不運の負傷引き分けでしたが、次戦KO勝利で再起。井上通文会長も「まだまだこれから脂がのってくる」と成長に目を細めます。

そして迎えた11月24日のプロ5戦目。会場は友人や親戚が見守る地元・方城体育館。「今まで試合前は不安に押しつぶされそうでしたが、今回は初めてのイメージで試合に臨んでいる。それだけの練習をしてきました」。

万全の準備とためまぬ努力に裏打ちされた確固たる自信を胸に、メインイベントとして凱旋試合のリングに立った久富選手。逆境を越える挑戦へ……。運命のゴングを静かに待ちました。

平成から令和へ——。存続の危機に立たされた地域のマイレール

時代を駆けた鉄道の 未来を賭けた挑戦

旧国鉄の廃線対象だった赤字ローカル線を引き継ぎ、平成の幕開けとともに誕生した「平成筑豊鉄道」。地域の足として時代を駆け抜けた鉄道は今、存続の道を探しもがき苦しんでいます。

**黒字から赤字へ転落
社長公募に託した命運**

開業以来10年間、第3セクターの鉄道では異例の黒字を維持し「三セクの優等生」として全国的に脚光を浴びた平成筑豊鉄道。しかし収入の約16%を占めていたセメント輸送が平成15年度末に鉱山会社の事業撤退により廃止。黒字経営維持の肝であった貨物輸送を失い、長引く不況、

少子化による通学生減少、自家用車普及による旅客輸送の赤字をカバーできなくなりました。そして赤字決算が続く厳しい経営環境を打開するため、平成29年、新社長公募に会社の未来を託します。

**逆境が生んだ観光列車
非日常利用に見た光明**

厳正な審査を経て、県内外の応募者88人から選ばれた河合賢一新社長。就任後、観光列車「ことこと列車」や貴重な旧国鉄車両「キハ2004」などのローカル鉄道ならではの魅力に注目します。「日常利用はこれから必ず落ちていく。それでもここにしかない、本当に魅力的な目標があれば遠方からも乗って頂けるはず」と非日常利用に活路を見えています。

「値上げしても満足頂ける、質の高いサービス提供しかない」と厳しい現実を受け止めています。

**逆転へのためまぬ挑戦
次代へ架けるマイレール**

さらに追い打ちをかけた昨年7月の西日本豪雨。平成22年・24年の豪雨被害と合わせ、被害総額は4億5千万円にものぼりました。「災害後、小学校や地域から義援金や励ましの言葉をいただきました。子どもの将来や利用者のため、この鉄道が消える未来は絶対に避けたいと思いました」。地域鉄道の消滅は、学生や高齢者などが移動手段を失うこと。教育面や福祉面で不利になった地域は、さらなる人口流出が進む危険も秘めています。



↑福岡女学院大学と連携協定を結ぶJALの参画でプロジェクトが進行。ことこと列車の平日活用を目指し、行政・大学・JAL・平筑の4者が意見を出し合い運営に反映する予定。

「1日1日を積み重ねて30年。なんとか次の世代へ鉄道のバトンを渡したい」と決意を表わした河合社長。9月から福岡女学院大学の生徒が鉄道の日常利用方法を提案する官・学・民の連携事業も開始。他企業との連携も視野に入れた多様な可能性を検討しながら、逆転に向けた道を模索しています。



**ことこと列車
COTO COTO TRAIN**

七つ星のデザイナー・水戸岡鋭治氏が設計。内装・料理・サービスともにローカル線では例の無いこだわり抜かれた内容が魅力の「日本一ゆっくり走る」観光列車。

平成筑豊鉄道 **河合 賢一** 社長

東京大学中退後、大分県庁勤務を経て(株)九州産業交通の取締役就任。関連企業でも取締役を務め、公募で同社代表取締役社長就任。



↑鉄道ファンを中心にクラウドファンディングで存続した、全国でこの一台のみ現存する「キハ2004」。



↑朝のピーク時の金田駅。鉄道を失うことは町内千人以上が通勤・通学の足を失うことにつながります。

開業から見守り続ける生き字引

地元鉄道の誕生に、真っ先に出向の手を挙げました。当時珍しかった第3セクターの鉄道運営は全て手探り。沿線自治体や社員が一丸で頑張ったことを覚えています。車と違い、乗れば必ず記憶に残る鉄道。ここにしかない魅力があると信じています。



開業時にJRから出向唯一残る現役乗務員 **高藤 猛**さん(70)



↑平成元年10月、金田駅を出発した開業一番電車。→開業30周年を記念した「へいちくフェスタ」で行われた企画で、200人が同じ線路でことこと列車に旗を振り見送った。



童謡 = 音楽

2日間とも行われた、町の誇る「上野焼」と「音楽」の共演の舞台。ピアニスト・畑野主慧さんのピアノ演奏と町の窯元による大型作品成形。2つの感性が融合した初開催のステージは、町の魅力を掛け合わせ誕生した大茶会を象徴する場面として来場者を魅了しました。



Koyo Kawamura

器 = 上野焼



↑ 国内線・国際線で毎月360万人以上の閲覧可能数を持つ機内誌「スカイワード」。11月号で上野焼や「ことこと列車」にも焦点をあて、9ページにわたり筑豊を特集。



↑ 「JAL 新・JAPAN PROJECT」の福岡特集に合わせ、JAL機内で流れた福智町のPR映像。



日本航空地域活性化プロデューサー／福智町観光アドバイザー
武知 眞一さん

山口・北九州支店長時代に訪れた福智町に魅力を感じ、イベント企画や調整などまちづくりに尽力。今も地域の魅力を発掘するアドバイザーとして多くの人をつないでいる。

客するイベント誕生の原点でした。そして挑戦と成功を重ね7回目の今年、大茶会は世界に羽ばたく大企業・JALの名を冠するまでに成長します。

分かれ重なる成功体験
7年の月日が築いた信頼

「偶然訪れた福智町で、若い人たちが積極的に活動する姿に心を打たれました。今は私も町のフアンの一人です」両者の関係をつないだ日本航空の武知眞一さんは笑顔で当初の印象を語ります。7年前のこの出会いから始まったJALのサポート。イベント共催、修学旅行でのJAL機利用など関係を深める中で、大きな転機が訪れます。平成30年、町として全国で2例目の包括連携協定締結。長年の信頼が形と

なった瞬間でした。

「7年前は社内で筑豊の知名度は低かったが、今は機内誌での特集やイベント冠化まで実現した。ともに挑戦を重ね、成功体験を共有したことが人の輪をつくり、今につながっています」と武知さんは振り返りました。

磨いてこそ輝く町の個性
日常的な魅力の創出へ

「この町には他に無い個性がある。それをどう見つけて、みがいしていくか。成功の2日間に満足せず、残りの363日が課題」。これまでの大茶会の成功で、町の認知度は着実に高まりました。しかし本当の成功は定住・観光につながる。創り上げた1をどれだけ積み上げられるかは、これからにかかっています。



7度目の開催となる今年、11月9日から2日間行われた「JAL 福智スイーツ大茶会」に、過去最高の3万2千人が福智町を訪れた。



きっかけは発想の逆転
町のシンボルイベント誕生

陶の里で4百年の伝統を誇る「上野焼」。「かもめの水兵さん」や「うれしいひなまつり」など童謡史に残る名曲を手がけた作曲家「河村光陽」。ともにすぐれた観光資源でありながら認知度は高いとは言えず、観光の柱がないことは長年の課題でした。

その中で生まれた発想の逆転。上野焼本来の用途である「茶陶」から着想を得た、茶菓子「スイーツ」が題材の「平成の大茶会」。県内の菓子店を一所に集め、町本来の魅力を掛け合わせる。「合わせ技で相乗効果を生む」発想が人口を越える3万2千人を集

Turning Point **つながりが生んだ新企画**
スイーツコンテスト初開催

「上野焼とスイーツ」という原点に立ち返り、盛り付けの美しさを競うコンテストを初開催。JALの人脈で豪華18人の審査員が集まり、企画が実現しました。

意識改革で再建果たしたJAL

かつて経営破綻により会社更生法の適用を申請したJAL。企業理念を実現する「JALフィロソフィ」による全社員の意識改革を行い、3年で東証一部に再上場する異例のV字回復をみせました。その徹底した妥協無き精神は町の模範となっています。



物事を成し遂げるとき、最も難しいのは0から1を生み出すこと。7年前、町に立った「福智スイーツ大茶会」という明確なフラッグ。1という数字の存在が、魅力の相乗効果の可能性を高めました。

炭鉱から観光へ——。「JAL福智スイーツ大茶会」
0から1へ



↑本年度、民間移譲に向けてポンプの清掃やケーブル交換工事を行い、開業当初の泉質を取り戻した。



↑有名温泉情報誌の「九州の温泉 50選」にも選ばれた「ふじ湯の里」。北九州市からの固定客が多数。

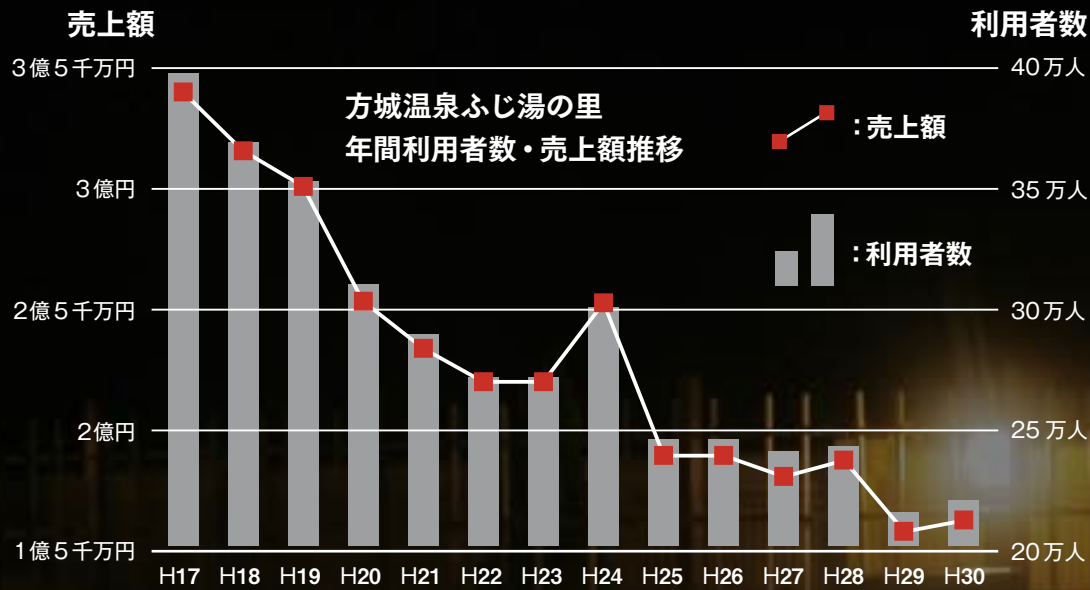


↑ふじ湯の里完成前の4年5か月間、運営した仮設温泉。当時からその良質な泉質が評判だった。

町一番のにぎわい誇る「ほうじょう温泉 ふじ湯の里」完全民営化への道

公共温浴施設の挑戦 存続かけた転換点

閉山の苦境を越えて財政再建を果たした方城町が、希望に沸いた観光の核となる温泉施設の誕生。高い潜在能力を持ちながら直面した厳しい現実、町内一の集客施設が生き残るには何が必要なのか。民間の力に活路を見出し、動き出した一つの公共温泉にスポットを当てます。



観光施設運営検討委員会
池田 昇 委員長

福智町商工会長や町内の公共温泉施設「日王の湯」理事も務める。多数の団体や委員会を代表として先導し、観光への長年の貢献で昨年「福岡県観光功労者表彰」を受賞。

Turning Point 地元の市場復活に向けて

元ふれあい市 民間移行へ



16年もの間、地域から愛されてきた「上野の里ふれあい市」。2月に惜しまれつつ閉業した施設の民間力を活用した有効利用のため、準備を進めています。募集など詳細は広報紙や町公式HPでお知らせしていきます。

無くては困るかけがえない湯

十数年前、仮設温泉に入ったときその泉質に驚きました。通える場所にこれだけ良質な温泉があるのはありがたいことです。温泉にきて福智町の魅力も知りました。私にとって本当に大切な場所。これからもずっと残ることを期待しています。



北九州市から毎日通う仮設時からの常連
山本 健三 さん

「やはり経営はプロ集団。民間のノウハウが無ければ立ち直れない」と観光施設運営検討委員会の池田委員長は力を込めます。委託先の募集方法は全国から優秀な業者を募る公募型プロポーザル方式。用途は介護や福祉施設ではなく、万人に向けた「温浴施設」であることを必須条件としています。

そして11月25日、第1回目のプロポーザル。関係者や住民の

町内一の集客施設存続へ 全国公募に託す未来

指定管理者制度による運営では限界を迎え、町の財政も圧迫するようになってきました。そこでふじ湯の里は民営化へと大きくかじを切ります。

見守る中、2業者が今後の運営方針や展望を提案。しかし両者ともに委員の求める基準点を上回らず、選定は見送られました。「ふじ湯の里は今も町内一利用者の多い貴重な観光資源。この公募は絶対に失敗できません。施設の未来を託せる委託先を厳正に選定したい」と池田委員長は結果を受け止めています。

また「温浴施設運営は多くの自治体が失敗しており、その民間移行は全国的な課題であり時代の流れ。行政がきっかけを作り、民間の経営力で正しい運営に導くのが本来の形」と今後の公共施設の在り方も見据えました。

進み始めた完全民営化。ふじ湯の里はその先駆けとして、大きな転換点を迎えています。

Turning Point 全国平均2.7倍の床面積 公共施設管理計画を策定

現在福智町が保有する保有する公共施設は約300。その床面積を町民一人当たりに換算すると10.17㎡となり、これは全国平均の3.74㎡と比較して突出して高い数字です。この状況を受けて、福智町では平成29年に「公共施設管理計画」を策定しました。現在は全課が保有する各施設に対して調査を行いより詳細な「個別管理計画」を策定中。今後の民営化・統廃合に向けて慎重な検討を続けています。



↑全課の保有施設を調査し、必要性の有無や今後の運営方針など詳細なデータを収集。

屈指の泉質と湧出量
町が沸いた温泉の誕生

平成初期、再建団体を脱した方城町は町の活性化のため、温泉開発の可能性を探ります。その調査で明らかになった福智山活断層に貯蓄する水源。平成8年に掘削に着手し、翌年に地下千500mでの温泉湧出に成功。町は大きな期待に沸きました。

低アルカリ性の湯は周辺で類を見ないほど良質で、湧出量も毎分2百リットルと十分。平成11年に仮設温泉として営業開始すると休日は駐車場がたちまち満車になる人気ぶりでした。そして掘削から8年、ついに「ほうじょう温泉ふじ湯の里」が完成。町の観光の核として、期待を背

負っての誕生でした。

オープン後は北欧風や和風など遊び心のある浴場、開放的な空間など目新しい設備が人気を博し、最盛期には目標を倍近く上回る38万人が来館。合併当初も客足は衰えず、町を代表する観光施設であり続けました。

直面する運営の難しさ
泉質の良さも裏目に

しかし全国的な温泉の乱立、激しい競争の中で徐々に集客数は減少。近年ではピーク時の半分に落ち込みました。さらに含有成分の多い泉質が逆に設備の痛みを早め、修繕費用はかさみました。雇用創出、地域還元を目指した公共温浴施設は利益最優先の経営が厳しくなり、町の

消せない灯

町は消えてしまうのか
20年で人口はさらに半減

「消滅可能性自治体」。次の世代の人口を左右する20〜39歳の女性が、令和22年までの40年で5割以下に減る可能性がある自治体を指す言葉です。5年前に日本創成会議が打ち出し、全国市区町村の半数、896自治体が指定されました。福智町の人口減少は予想を上回る速さで、合併時2万6千人いた人口は、この先20年で約半数の1万2千人まで落ち込むと言われています。

今後は存亡危機の地方と、人口が集中する都市部の極点化が加速すると考えられています。解決策は「まちづくりで交流人口や関係人口を増やす」「移住で定住人口を増やす」しかありません。確かなビジョンを持ち、町全体で取り組まなければ「消滅」の足音はすぐそばまで近づいています。

逆転の鍵は施策と理解
挑戦と支えが未来を拓く

町の財政は財源が歳出に追いつかず、創意工夫をこらし最小の経費で最大の効果を挙げなければ10年以内の「財政再建団体」を覚悟しなければならぬ状況です。「鉛筆一本買うのにも国の許可がある」と例えられる再建団体。町の自主性は失われ、徹底的な歳入確保・歳出削減が求められます。その時一番に影響を受けてしまうのが住民のみなさん。負担は増加し「住みにくいまち」になるのは疑いようありません。

福智町誕生から13年、合併による特例措置は終わりを迎え、ひとり立ちの時が近づいています。今後は本当に必要な物を判断する、事業や施設の「選択と集中」が打開の力ギとなります。

そのためにはこの町の人すべての意識改革が必要です。「なんとかなる」と樂觀的でも事態は変わり「何をしても無駄」と悲觀的になっても未来は開けません。町をあげた逆転へ。好転するため後押し、転落させない支えを行う「人の力」が地方の活性化を生み出していきます。

壁を越え地方創生の取り組みが生んだ町の拠点



長年図書館が無かったこの町に、最新設備を導入した複合施設は「不要」との声もありました。しかし旧赤池町役場をリノベーションし魅力的な空間を創出したことで、開館3年で来館者40万人にせまる町を代表する施設に成長しました。この施設の一番の特徴は「図書館は静かな場所」というイメージを覆す、私語が自由にできるということ。そのことで気軽に立ち寄れる多くの人の居場所として愛されています。これからも利用者のニーズに合うイベントや官・学・民の連携が生まれる町の拠点でありたい。地方創生事業の先駆けとして誕生した「ふくちのち」は、まちの一つの未来を作ったとも言えるのではないのでしょうか。



図書館・歴史資料館
ふくちのち館長
井上 憲治さん

Turning Point まちづくりの大綱・第2章 町を次のステージへ導く 「第2期総合戦略」策定中



第1期福智町 →
まち・ひと・しごと創生総合戦略

「まち・ひと・しごと創生総合戦略」は、人口急減・超高齢化に対し、各地方それぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会創生を目指す指針です。平成27年に「第1期福智町総合戦略」を策定し、政策の骨子としてきました。今年は5か年計画の最終年として第2期目の計画を策定中。第1期での目標達成状況を踏まえ、地方創生に向けたより具体的な方針を検討します。

特集

逆転

立ち上がる。何度でも

終

人口減少、財政危機。町が抱える多くの課題。灯をともしつづけるのは、一人ひとりの意識と協力、そして挑戦を止めない強い意思。全住民の力がまちづくりを支えています。